

ヨーロッパの大学図書館

—講演—

1月26日、高橋重臣氏（天理大学教授）を迎えて、ヨーロッパの大学図書館についての講演会を開催した。

百年、二百年の歴史をもつヨーロッパの大学の図書館はベルリン自由大学を除いて（これは戦後アメリカ式に建てられた）一般に建物も古く、アメリカのように近代化されていない。ヨーロッパでは従来、大学における研究や勉学は図書館を利用してなされることがなく、研究室にある教授自身の専門書で事足りており、学生もそれを利用して勉強した。したがって長い歴史をもちながら、大学図書館には本はさほどふえず常に等閑視されていた。20世紀になって出版が盛んになるとともに、ようやく図書館がクローズアップされてきたのである。しかし過去の各時代ごとに生まれたシステムが、何の調整もなく現代に混在していて、利用に支障をきたしている。例えば目録にしても、古くは大福帳式、次の時代は大きなカード式、その次には小さいカードと、2本立、3本立になっており、書架においても、この棚は本の大小、次の棚はアルファベット順という具合で一貫していない。このため検索が難しく、利用者は司書の助けを借らねば使いこなせない。近代化の遅れている点では日本の大学図書館と変らないが、日本の大学図書館の多くが、その大学人だけのものであるのに対して、市民にも旅行者にも開放されていた。しかし前述のごとく検索が非常に困難なので、紹介状をもらって、館員の全面的な援助を頼むのを必要とした。館員は実によく本のことに精通していて、サービスは行届き、その書誌学的知識は大学教授と大差がないと思われた。これは大学の司書には特に高い知識が要求され、その養成教育も bibliography を中心として非常に高度であり、検定試験の合格率50%というきびしさのためであろう。待遇のよいことももちろんである。かねがねきいていることを目前に見て、日本との大きな差をつくづく感じた。

その他、図書館発行の利用案内や目録には、出版広告や本屋の広告のページが何枚もあり、またこの利用案内や、所蔵貴重書の写真、図書館の建物の絵葉書を売っているなど、日本のお役所的な堅苦しい考え方は大分趣を異にしている興味深かった。

以上自由主義国の大学図書館について見聞を述べられたが、2月24日には京都市教育委員会の中山昭吉氏から、社会主義国の大学図書館について聞くことになっている。

医学図書館の Contents Service

医学部図書室開室（昭和25年）以来、約30種の外国雑誌について謄写印刷によって Contents Service をはじめ、その数は漸次増加しながら昭和32年頃まで継続した。

医学図書館開館（昭和40年10月15日）を前にして Elefax と A. B. Dick の講入申請が許可された。昭和41年2月1日に両機併用によるオフセット印刷で Current Contents No. 1 を発行以来、年間約70回新着の外国雑誌約200種について250部印刷し、医学部、附属病院の各教室、医学関係の研究所、薬学部および農学部配布し好評を得ている。また京都府立医科大学にも相互利用の申合せにより提供している。

しかし邦文雑誌については、現在とりあげかねる実状であり、外国雑誌を200種と限定したのも経費などの問題である。

より広範な情報を研究者に提供するように努力するのが今後の課題である。